辭不往焉。親愛之厚。志操之堅。其如此矣。奚爲天之不少助。而竟夭折之耶。余也表於其墓。嗚咽以泣。二十六年十月。伯兄內田某述。

病中有感

杉山富槌

東風輕扇晴雲新。病床空負眼前春。名利情斷感增切。賦詠吟苦意太眞。
默考往事意惘々。沈思前途心怏々。十年苦學何所爲。起見閑庭草獨長。
亭々老松晚節堅。碧翠映雲浥雨鮮。人生渾是浴天澤。塵外豈須謝世緣。
況是方今多變異。世事紛々謀不利。憂國志士論縱橫。憤慨談志催暗淚。
縱令斯身非異才。滿腔熱血心未灰。男兒死全素所愧。一生只期爲玉摧。
枕頭拭劍光芒燦。病魔排去百憂散。今日些事豈敢論。他年磨來斷混亂。

臥病思家

中內義一

看月沈吟憂何切。對花默坐感無量。病來一臥路千里。枕上孤燈淚萬行。曉氣稜々侵瘦骨。
松聲肅々徹愁腸。家書欲報恐添憶。句々抑情字々傷。

春望

吉野懷古

粉蝶翻々花滿枝。青烟裊々柳垂絲。可無佳句酬春景。靜倚明窓把酒巵。

稼堂先生評、流麗可誦、

暗雲慘憺碧峰寒。舊苑春闌黃鳥殘。借問落花經幾世。行人停杖獨悲酸。

春日漫興

滿眼春光宿雨晴。桃花枝上囀黃鶯。悠然胸底詩情動。去向翠烟深處行。

同評、春興動人、

批評

再ひ『文學上に於ける現時の國家主義』を讀む（承前）

晛天窟主人

第二　國民文學と世界文學と

驚くべきかな、前の學人と後の學人と其論旨を異にせること、云ふらずば、學人の意見に撞着の明なること。學人は文學と國家と合一する所あるべからずと明言し、文學と國家との關係は、政教分離論に於ける政治と宗教との如く、決して相涉るべからずと公言しながら、其次章に於て揚言して曰く、

『國家より文學を離るの非なるは誰しも知る所にして、予が國家以外に文學を引離せよといはざりしは前章既に評言し得たりと信ず』

と。余は前章に於て既に此撞着に就て略論せり、今必ずしも蛇足を加へじ。試に學人に問ふ、余が第四十號に於て記述せし批評の精神は如何。余ハ寸毫も政權を文學に加へよとの意思を有せざりしは、學人必ず認めざるべからざる所ならむ。要は唯前の學人が國家と文學と合一する所あるべからずといへるに對して、國民文學の重ずべきを辨せるに在りき。學人にして眞に『國家より文學を離すの非なる』を初より知りしならば、知らず何の要あつてか、國家と文學とハ合一する所あるべからずと論じたる、抑も亦何の由緣あつてか余をして國民文學を唱道せざるべからざるに至らしめたる。罪を余が誤解に歸するか、學人が前後に於て論旨を異にせるかに歸するに非ずんば、到底此の撞着を說明する